

縄文時代、弥生時代に薬草が栽培されていた可能性について。

那須浩郎氏は国立歴史博物館研究報告第187集、2014年、7月、の論文要旨の後半に縄文時代晩期終末（弥生時代早期）には九州を中心には初期水田が見つかっている。

最近、京都大学構内の北白川追分町遺跡で湿地を利用した初期稲作の様子が復元されているが、この湿地では明確な畔区画や水利施設が認められていないが、イネとアワが見つかっている。先生はイネが水田でなく湿地で、アワは微高地上で栽培されていたと考えられている。この湿地を構成する雑草や野草、大木植物種類組成と九州の初期水田遺構の佐賀県菜畑とを比較した結果、典型的な水田雑草であるコナギ、オモダカがここでは見られず山野草が多いという特徴もあった。この結果から初期の稲作は（水田でなく）湿地林を切り開いて。明るく開けた環境を供出し、ここで栽培していた、と想定されている。

先生はイネや雑穀などの穀物資料に随伴する野草や雑草の組成に着目してイネと雑穀の栽培形態を検討した結果、イネと雑穀は縄文時代晩期終末に同時に伝来しそれぞれ立地を分けて栽培されていたので出土状況に地域差があるのではないかと考えられている。

縄文晩期終末/弥生前期初頭の北白川追分町遺跡、縄文晩期終末/弥生早

期の菜畑遺跡、弥生前期の菜畑遺跡、三つの異なる時期や場所でえられた出土植物種の比較をされている。

先生の調査結果の一覧表を見て分かったことがあった。

これら三か所の時期と場所の異なる遺跡で共通して出土していた栽培植物があった。

イネ、アワ、は当然として、シソ/エゴマがあった。また、3か所で共通して出土しているのは、水田、水中（水中）雑草ではホタルイ属、ポントクタデ、であり、田畑（湿性）での共通雑草はミゾソバ、イヌビエ、であった。畑（人里）の雑草はハコベ属、イヌタデ属、イヌホオズキ、カナムグラ、スミレ属であった。

これらの遺跡で米や雑穀以外で栽培されていた植物があったことや、異なる時代、異なる場所にもかかわらず、共通して同じ植物が多数あったのはこれらの植物になにか共通の利用価値があったのではないかと考えられた。そこで、これらの植物の有用性、例えば、食用可能か、または、薬草などとしての機能があるかを検討してみた。

シソ（紫蘇、学名：*Perilla frutescens* var. *crispa*）は、シソ科シソ属の植物）食用可、鎮痛作用、解毒作用、解熱作用、発汗作用などあり。

エゴマ（荳胡麻、学名：*Perilla frutescens*）はシソ科の一年草。シソ（青紫蘇）食用可、縄文時代にはクッキー状炭化物からも検出。抗アレルギー作用があるポリフェノール含む。花粉症など。

ミゾソバ（溝蕎麦、学名：*Polygonum thunbergii* または *Persicaria thunbergii*）食用可。鎮痛、止血、（土方歳三の家伝の石田散薬の成分）目的で骨折、筋肉痛、切り傷に服用。

イヌビエ（学名：*Echinochloa crus-galli* var. *caudata*）食用可（若葉、果実）、食欲不振、健胃作用。

ハコベ（繁縷、繁萋）、ナデシコ科、ハコベ属（*Stellaria*）食用可（春の茎葉）、生薬、催乳剤、胃腸薬、湿疹。

イヌタデ（犬蓼、学名：*Persicaria longiseta*）食用可、虫さされ、腹痛、胃腸炎に。

イヌホオズキ（犬酸漿：学名：*Solanum nigrum*）煮て食べる国がある、生薬名 龍キ。

カナムグラ（学名：*Humulus japonicus*）（食用不明）健胃、利尿、膀胱炎（生薬名なし）。

ヤマグワ（学名：*Morus australis*）

果実食用可、抗酸化作用あり。

ホタルイ属、ボントタデ、は雑草、食用、薬用でない。スミレ属（種類多い）食、薬、不明。

このように、異なる時代、異なる場所にもかかわらず、共通して栽培（？）あるいは生育していた上記の植物はほぼすべて食用可能である。また、すべて薬効があるので対症療法を求めて利用されていたとも考えられる。コメを植えていた畑、水田のそばに食用可能で、また薬用目的で栽培されていたかもしれない。これらの雑草（食べれるし、薬にもなる）の情報が共有され、伝承されていたのであろうか。

文献省略。PubMed、Wikipedia、本年3－7月も参考にしました。

（担当：医療法人徳洲会  
全南病院長 上山康男）